# 『分身』の叙述と対位法 (二)

佐　野　健　治

ゴリャートキン氏とペトルーシカは主従の関係であるが，相互信頼の間柄とは言い難い。むしろ目下は，相互不信の気持ちが両者を支配している。ゴリャートキン氏は主人であるから，相手を呼んで叱りつける。他方ペトルーシカは相手が主人であるから口に出してものが言えず，いきおい奴隷の言葉を使う。すなわち，不満や軽蔑を，にやりと笑う，黙りこくる，さっさと行ってしまう，食いつきそうな苦い顔をする等といった表現を使って表す。それぞれ相手に対する不信ないし批判は，その表現方法が異なるということよりも，むしろ，原理が異なることの方が問題だろう。いや，ゴリャートキン氏の方には原理らしいものはないに等しいから，原理が異なるというのは当たらないかもしれない。『分身』の主人公にとって，人間も世界も，超越的な理性の体系でなく，偶然と恣意のいわば突然の体系であった*。偶然と恣意，それがまあ，彼の原理といえば原理である。これに比して，ペトルーシカは，長期的に持続できるような原理を備えている，と言って言い過ぎであれば，そのような原理を身につけようと目指しているらしい。では彼は，いかなるゴリャートキン氏批判の尺度をもち，作者ドストエフスキーはそれをいかに読者に提示したか。

下男ペトルーシカは姿が見えないことが多く，これが旦那ゴリャートキン氏の不満の種の一つである。小説冒頭，ゴリャートキン氏は引き出しに貯めた紙幣 750 ルーブリを勘定する。それと言うのは，彼独特のやりかたの社交界登場（またはこれまでの失敗のやり直し）を狙いとするキャンペーンを当日実行するために，賃貸の馬車と貸し衣装を用意し，いざ出陣を前に軍資金

を取り出して数えたのである。数えるに当たって，下男が周囲にいないことを確かめた。それが済むと今度はペトルーシカを探して回った。ペトルーシカはしょっちゅういない男であり，主人公は不審の目を向けている。「いったいどこへ行きやがった」とドアを細目に開けて覗いてみると，ドアの外でペトルーシカはかなり大勢の下男や女中や，行きあたりばったりのならず者たちを相手に話しをして聞かせている。話しのテーマも，話しぶりもどうやらゴリャートキン氏の気に入らなかった。ペトルーシカの考え方には理解し難いところがあって，主人は「あのこすい奴 bestija はたとえ一銭のためにでも喜んで人を売る奴にちがいない」と思って不信感をもち，つねに心の中で悪罵を吐きかけている。同時に，ゴリャートキン氏は何かをペトルーシカの中に感じとっていて，それが何であるのか関心をそそられている。

小説は一切をゴリャートキン氏の意識の動きを叙述することに限定している。語り手はゴリャートキン氏以外の内部に立ち入ったり，これについて語ることはない。ペトルーシカについても，すべてはゴリャートキン氏の意識の対応を通じて語られる。そのさい語り手は主人公ゴリャートキン氏からつかず離れずの位置から主人公を描写する（ときには第三者の目で見るが）。そのつかず離れずの位置というものが独特である。主人は，招待されていない宴会へ，わざわざ取り寄せたお仕着せを下男に着せて，出かける用意をしているところである。その描写を例に挙げると，つぎのような一種微妙な語りである。「しかしその朝ゴリャートキン氏はひどくそわそわしているようだった。と言うのは，着付けを手伝っていたペトルーシカがにやにや薄笑いをもらしたり，しかめっつらをしていたことには，ほとんど気がつかなかったからである。やがて，なすべきことをすべて終わって，すっかり服を着終わると……これも同様すっかり用意のできていたペトルーシカの姿を，ほれぼれと打ち眺めた。」これは主従の気持ちが離反というよりは，むしろ正反対を向いていることを，ここでは第三者の目から語っている。「なにか紋章らしいものを付けた淡青色の辻待ちの貸し馬車が，がらがらという音を立て

て入り口の階段に横付けになった。ペトルーシカが御者とぼかんと口を開けて見ていた二,三人の野次馬にウインクしながら，主人を馬車に助け乗せた。」こうして，すでに常軌を逸していた主人公が出陣する姿はドンキホーテの模写であるが，従者はサンチョとは違って，主人と調子を合わせようとはしない批判者である。彼は主人を人びとの前でからかう。ペトルーシカの主人への批判はなにか，彼の根拠はなにか。彼の言葉からそれはある程度知ることができるし，そこからゴリャートキン氏という人間を推察することができる。

ペトルーシカの主人への立場を最も明示的に示すのは，終わりになってゴリャートキン氏が彼に別れの挨拶をするくだりである。作者は第12章の書き出しをつぎのように始めている。

「ペトルーシカはなにか妙にぞんざいな態度で，顔にはなにかしら鯱矛(しゃちほこ)ばった，真面目くさった表情 kak-to stranno-nebrezhno i s kakoj-to kholopski-torzhestvennoj minoj v litse. を浮かべて入ってきた。明らかに見て取れたのは，彼がなにかを心に決めたこと，自分の権利をまったく確信しきっていることであった。そして自分はもう全然関係のない人間であり smotrel sovershenno postoronnim chelovekom, つまり誰か他の者に仕えている to est' ch'im-to drugim sluzhitelem のであって，すくなくとも以前のようなゴリャートキン氏の召使いでは決してないという顔をしていた。」（下線ー佐野，以下同様）

「全然関係のない人間」,「誰か他の者に仕えている」という顔をしていたということについて，両者の会話が背景と実態をある程度まで明らかにしている。ゴリャートキン氏は「万事がこれで終わった。ところで，ひとつ友達に言うように，はっきりと，言ってくれないか，お前はいったいどこへ行ってたんだ？」と尋ねる。

ペトルーシカは答える,「どこへ行っていたって？　よい人たちと一緒にいたのですよ。Mezhdu dobrykh ljudej-s」ゴリャートキン氏は「知って

る，お前，知ってるよ」と答える。よい人たち dobrye ljudi とは，何であるのか，そしてゴリャートキン氏はそれを知っているのか，これが問題である。彼は続けて問う，「おれはこれまでずっとお前に満足だったよ，いいかね，雇用主の証明書をちゃんとつけてやるよ……。〔雇い主が暇を出す被雇い人に与える証明書に，ペトルーシカは何の興味も示さない〕ところでお前は，いまその人たちのところで何をしているんだ？　Nu, shto zhe ty u nikh teper'」ペトルーシカは「何って，旦那！　ご存知のとおりですよ。決まってますよ，よき人 dobryj chelovek（単数）は，悪いことを教えませんよ。」ゴリャートキン氏は「知ってる，知ってるよ，お前。今ごろは，よい人たち dobrye ljudi が，あまりいないからね，大事にしなくちゃ。ところで，どんなふうにやっているのだい？　Nu, kak zhe oni?」両者の会話は同じ意味の言葉として理解が重なり合うところと，同じ言葉から別の意味を思い浮かべているところが，微妙に交差する不思議なやりとりである。

ゴリャートキン氏が「お前の熱中と熱心さは分かっている tvoju revnost' i userdie znaju」と言うとき，それが彼の勤務について言っているのか，それともペトルーシカが専念しているあることについてなのか，そこがどちらともとれない，謎めかした表現になっていて，「お前が陰ひなたなく一生懸命やってくれたのは，ちゃんと分かっている」というふうにもとれる。「私はね，友よ，お前を尊敬する。私はよい正直な人間なら，下僕であろうと，尊敬するよ Ja dobrogo i chestnogo cheloveka, bud' on i lakej, uvazhaju.」，これも同様に一般的な当然のことを言っているようにも響く。

ペトルーシカの答はまた二重の意味に取れる，「何と，当たり前のことですよ！　なにしろ私どもは，よりよいところへ行きたがるもんですよ。Nash brat, konechno, sami izvorite znat'-s, gde luchshe」これが就職先を指しているのか，ある信念を指しているのか，それは聞き手の取りようにかかっている。「われわれの兄弟は，無論，ご承知のように，つねに，よきところを目指している。」そしてペトルーシカの結論，「まあそういうことでしてね。

私としましても！　なにしろ，よい人がいなければ世の中はうまく行かない，ということは，分かりきっています。Uzh tak ono-s. Chto mne! Izvestno, sudar', chto uzh bez dobrogo cheloveka nel'zja-s.」これもまた一般的なことのようにも聞こえるが，しかしここまで「よい人」が反復して強調されると，この「善なる人」dobryj chelovek（単数）がキリストを指すことは自ずから明らかになる。言うまでもなく，それは作品のキイワードであろう。ペトルーシカの言っている意味は「もうはっきりと心は決まっています。私にとってはね。ご承知のように旦那さん，よき人なしには，この世は立ち行かないのですよ。」

他方，ゴリャートキン氏の応答は，ペトルーシカの言葉が分かっているとも分かっていないとも取れる。「いや，結構，お前，結構だよ。それは私も感じているよ。Nu, khorosho, bratets, khorosho; ja eto chuvstvuju...」これも二重である。しかしゴリャートキン氏は，話しを，よい人たちの話しから，給金，証明書，シャツの用意という実際的な事柄に転じる〔これも両者を比較させる意図が，作者にはあるだろう〕。ところがシャツの枚数を問われたペトルーシカは，なにか疑われたように思って，抗議する口ぶりで言う。「私はいかなる罪もいっぺんだって犯したことはありませんよ，旦那 a grekha kakogo za mnoj — nikogda, sudarj.」と言う。grekh はキリスト教的な罪，罪悪である。

これより前，ペトルーシカはゴリャートキン氏から，自分の分身の住所を役所の当直のヴァフラメーイェフに聞いてくるように，という奇妙な使いに出されて，帰宅が遅れ，主人公が気をもむというくだりがある（第9章）。待ちくたびれて寝込んだ主人公は，午前2時に下僕が重苦しいいびき gustoj khrap をかいて寝ているのに気づいて，起こす。ペトルーシカは「いわゆる死人のように酔っぱらって，立っているのもやっとである mertvetski p'jan i edva na nogakh derzhalsja.」このことにゴリャートキン氏は気づいて，彼を詰問する。ここでもペトルーシカは「よい人たちのところへ k

dobrym ljudjam 行ってきたんでさあ！」と答えている。「酔っているのじゃないか？」という問いには「そんなことは絶対ない，誓っていい Vot khot' sejchas s mesta ne sojti」と強く否定する。前後のペトルーシカの言動から見て，彼が嘘をつかない（二重生活を送っていない）人間であることは間違いないだろう（ただし嘘をつかない彼が，なぜか供述を二転，三転と変えるという不思議なことがあるが，これは後述の語り手の問題とからんでいる）。とするとこの「泥のように酔っていて，立っているのもやっとである」という状態は，何であるのか。それも外出から帰ってきた状態がそれである，ということが示唆を与えている。以上のことからドストエフスキーの後の作品世界に照らし合わせて推測できるのは，ペトルーシカは分離派の活動に深入りしていて，そのリーダー格であり（周囲の人々を集めて布教している），「私たちのところ」「よい人たちのところ」は特定の宗教グループ（分離派のいずれか）を指すということのようである。

注目したいのは，ペトルーシカが使い先のヴァフラメーイェフ書記から，「旦那（ゴリャートキン氏）はいい人 khoroshij chelovek だ，お前（ペトルーシカ）もやっぱりいい人 khoroshij chelovek に違いない」と伝えるように言われてきたという，「いい人」である。この「いい人 khoroshij chelovek」とペトルーシカが通っている先の「よい人たち dobryje ljudi」とは違っていて，さらに「よき人（単数）dobryj chelovek」とも違う。言葉として，ハローシーとドーブルイという形容詞の差異は，両方とも「いい，よい」には違いないが，対比して使うとき，後者ドーブルイには，ロシアの民話において使われたような，人間あるいは人びとを修飾して「尊敬すべき」「畏敬する」という意味をつけ加える働きがある。

主人公ゴリャートキン氏と下僕ペトルーシカが対置されたのは，ゴリャートキン氏の精神分裂状態（ロシア近代の産物）と比較されるために，対照的な歴史的所産として，ロシア正教の分離派がこれに対置されたのであろう。このドストエフスキー作品の基本的なテーマの一つは，第二作には正面から

提起されていたのである。

ギリシャ正教，なかでも分離派教徒の生活と思想は，ドストエフスキーがとくに関心を向けたテーマの一つであった（ドストエフスキーは，それを足場にしてキリストに近づいた）。『分身』は作品としていたずらに冗長な失敗作であるという定評は，例えばゴーゴリ『狂人日記』のパロディとしてだけ見るところに無理がある。またこれを精神病患者の状態をテーマとする小説ということも，今は言わない。見方を転じて，これをドストエフスキーが後に展開する文学の布石として見るとき，ここには一連の問題がすでに提起されていることが分かる。そこにドストエフスキーがこの作品に執着し自負した理由があったのだろう。そういう目で作品のとくに第9章以下の，小説としてのもたつきを見直すと，分裂症患者の瞬間，瞬間を生きる意識，すなわち過去，現在，未来をつなぎ合わせることなく現在だけを生きる意識と，ペトルーシカの終末論的世界との間には，まったく対照的なものが対置されている。ペトルーシカは言う，「私はよい人たちのところへ行ってしまいますさ……。よい人たちは正直に暮らしています，ごまかしなしに暮らしていますさ。一人が二人になるなんて，絶対ありませんさ。」ここにドストエフスキーが後半生の作品に展開する現代人への批判の出発点があっただろう。ただしそれはペトルーシカの出したような批判の形のまま，一方が他方を克服すべきものとして提起されているのではない。

ゴリャートキン氏は，突如，意識するよりも早く走り出したり，しゃべり出したりする行動の人間である。それは突然，不意に起こる。ゴリャートキン氏の意識はついに二つの分身に分裂した。両分身は性格においても，思考においても正反対の両極に分かれていて，両者の意識の相違ははっきりしている。しかし行動が先行し，かつ独走的であるという点は共通している。

小説では，語り手はゴリャートキン氏（〔旧〕）の意識に即して物語を展開していき，新しく現れた双生児の意識を代弁して語り手が語るということ

は，決してない。本来のゴリャートキン氏はわれらの主人公とか，旧ゴリャートキン氏と呼ばれ，他方新しく出現した分身は新ゴリャートキン氏と呼ばれる。〔新〕の方は最初のうちこそ，「きのう以来の知人，彼の親友，同姓同名者」と呼ばれているが，話しが進むにつれて「贋ゴリャートキン氏，例の堕落したゴリャートキン氏，得体の知れないやくざな，卑劣漢の，よからぬもくろみと野獣的衝動で知られている人物」にまで落ちてくる。対照的に本来のわれらの主人公の方は，「善意に満ちた，まったく公明正大なゴリャートキン氏」と最初から最後まで丁重な扱いである。こうして，語り手の扱いはまったく不平等きわまりないが，このような登場人物の片寄った扱いというものは，『分身』の特徴というより，その後の作品においても見られることである。それはドストエフスキー作品の作者と語り手と主人公の関係にいちじるしい特徴である。そこでは，語り手と主人公は密着した関係というよりも，むしろ融合した一体である。

『分身』で語られるゴリャートキン氏の闘争は，(1) 職場内の軋轢，(2) 〔新〕と〔旧〕との軋轢という二通りがある。(1)の方は人間の社会的な争い，(2)は一人間の内的な闘いである。

(1) 職場での被雇用者間の相克は，企業（会社，官庁）に雇用される人間が背負っている宿命的な対決である。およそ人間の歴史（近代以前であれ）に企業が発生して以来，職場における同僚間の確執も同時に発生したであろう。それは基本的には生活権をめぐってであるが，しかし意識的にはむしろ昇進とか評価とか名誉というカテゴリ的な基準をめぐる，男性の闘いである。闘いは金銭，地位，女性の獲得をめざす。

(2) 人間の内的闘いは社会的な闘いの部分であるが，それとともに，個人内部の機能である。『分身』のばあい，闘いはゴリャートキン氏の自作自演であり，彼の意識の中で行われる内部衝突である。それは一面では社会とは別個の，自分の中の闘いであり，自分がわが分身を敵に見立てて，相手が互

角の権利を持つものと認めて，相手と決闘する。それは自己の内なる二律背反の衝突であり，このばあいは自滅に至る。

けれども，原因は職場（社会）での自分の地位から出発しているし，コップの中の嵐で済まされない徹底ぶりであるから，職場を巻き込まずにはいない。結果としてゴリャートキン氏は社会から排除された。そればかりか，自己の中でも，〔旧〕は〔新〕に敵わなかった，というのがドストエフスキーの筋書きである。かくして両雄並び立たず，哀れ〔旧〕は〔新〕の軍門に降り，幽閉の身となる。つまり〔新〕は〔旧〕の意識の中では，勝ち残るのである。これはゴーゴリ『狂人日記』のパロディの形式を踏んでいるが，ここで提起された内容ははるかに文学の進む先を見越している。

では両者の論点の何が衝突するのか。

まず (1) 職場の問題。

ゴリャートキン氏には職場の軋轢というより前に，まともに同僚として扱ってもらえないという悩みがある。出自と能力という問題もあるが，なかんずく彼の役人との交流を妨げているのが言動の特異さである。もともと地方の下流貴族の出であるらしいゴリャートキン氏は，首都に出て来てかろうじて九等官になることができたが，次のステップである社交界入りを果たすことができない。それは上品な態度や上流社会の習慣に不案内であることに加えて，彼がつねに最初の一句でつまずく，つまり最小限必要な協調性を具えていないことが原因である。彼は「自分のちょっとした用事で誰かと談判をしようというその瞬間，いつでも決まって妙に気落ちして途方に暮れてしまうくせがあり，……なにやらぶつぶつと口の中でつぶやくと，腰をおろしてしまった。だが勧められもしないのに，腰をおろしてしまったことに気づくと，すぐさまこれは無作法なことをしたと悟って……またあわてて立ち上がった。……それから，一度に二つも馬鹿げたまねをしたことにおぼろげながら気づくと，……今度はどっかりと腰を落ちつけると，もう立とうとしなか

った。」（第2章）こういう性格である。

職場に敵がいると彼は考えている。「実に凶悪な敵で，そいつは私を破滅させようと心に誓っているのです」と彼はクレスチャン•イワーノヴィチ医師に訴える。医師との会話の中に彼が挙げた敵は，彼の競争相手で八等官昇進を果たしたウラジーミル•セミョーノヴィチで，課長アンドレイ•フィリッポヴィチ（主人公は熊と呼んでいる）の甥に当たる。ウラジーミル•セミョーノヴィチは上司ベレンジェーイェフ五等文官の娘クララ•オルスーフィエヴナに接近していて，ゴリャートキン氏にとってライヴァルである。

ゴリャートキン氏はつぎのようにクレスチャン•イワーノヴィチ医師に語った。課長のアンドレイ•フィリッポヴィチとその甥のウラジーミル•セミョーノヴィチの二人は「人間一人――それは私のごく親しい友人ですが――を殺すために，精神的に殺害するために，デマを飛ばした」と。ここで言う「私のごく親しい友人」は，他ならぬゴリャートキン氏自身である。デマの内容とは，「私のごく親しい友人」が，食事の出前をさせている料理店のドイツ女のおかみさんに結婚の申込をした。彼は，破廉恥にも，借りを払う代わりに，卑しい，汚らわしい，恥知らずのドイツ女に結婚の申込をしたというのである。聞いていた医師は，ゴリャートキン氏自身がたしかそこに住んでいたのじゃなかったか，と質問して，本人自らの問題であることを指摘する。ゴリャートキン氏はこれに「どうして住んでないのです」という奇妙な返事をするとともに，くつくつ笑った。後にこの件では，分身の新ゴリャートキン氏の方から皮肉を言われるはめになる，「なかなか味のよさそうな女ですな」と（第11章）。また，「あのいやらしいドイツ女の巣窟にこそ悪魔の主力が隠されている」と，ゴリャートキン氏は独白する（第10章）。

以上，職場の問題は，同僚の出世と女性関係である。

(2)　自己内部の問題。

〔旧〕が〔新〕と話しをしたのは，二日目の役所からの帰りの路上のこと。二

人は，普通人がつきあいを始めるときと同様，緊張と徐々に親しくなっていくという過程をへて，つかず離れず，切っても切れない関係を開始した。それはつまり自己の中の二人の他者である。

〔新〕は第二夜，長時間にわたって〔旧〕ゴリャートキン氏と低姿勢で応対した（第6章）。これらの〔新〕と〔旧〕の演技は，すべて実は〔旧〕ゴリャートキン氏の意識の脚本を，他ならぬ〔旧〕ゴリャートキン氏自身が自演したのである。それを語り手が脚色して作品に再現している。すべてを立案，制作し，語り手を選択し，これを演出しているのは作者である。演出家としての作者は以上の楽屋裏を決して明かさない。ちょうどそれは，マジシャンが舞台であれ楽屋であれ，手の内を絶対打ち明けないことと同様である。ドストエフスキーという作家は，仕掛についてはロを閉ざして，誰にも語らない。すなわち，〔新〕〔旧〕の問答はゴリャートキン氏の自問自答なのだと，もしひとこと言ってしまえば，それで語り手の演技と妖術はそれかぎりである。自己問答であることを認めないという建て前を，語り手（従って作者）は決して崩そうとしない。舞台のマジシャンがそうであるように，最後まで観客を騙し通すことが，語り手の仕事なのである。この作品は，仕掛を外部へ漏らさないための，張りつめた気迫に満ちている。

両者が話しをするようになる箇所以降にもどって，しばらく経緯を追ってみよう。

ゴリャートキン氏は新ゴリャートキン氏と会話を始めたとき，彼は心の中で，この新しい同僚〔新〕が大地の裂け目に（skvoz' zemlju）落ち込んでしまえ（言い換えれば，原初の暗黒のかなたへ帰れ）と願った。これがまず，分身に対して彼がとった対応であった（第6章）。原初の暗黒のかなたということは，ドストエフスキーの当初からのテーマであることが知られる。

〔新〕を自宅に連れ込むとき〔旧〕が懸念したのは，下男ペトルーシカの疑いの目であった。彼はペトルーシカの批判が恐ろしいのである。〔旧〕はしかし後悔するよりも早くドアをノックしてしまっていて，ペトルーシカはすでに

主人と客の外套を脱がせにかかっていた（第7章）。客は「主人の一挙一動をおずおずと怠りなく目で追い，その顔色をうかがっては，その肚の中を見抜こうと努めている様子だった。」こうして，両者には主客として演技するという役割が与えられる。

語り手は言う，「ゴリャートキン氏は善良な人間 dobryj chelovek だった。」語り手は一貫して〔旧〕を弁護し，防衛している。そして語り手は〔旧〕ゴリャートキン氏と融合した存在であって，自己分裂していることを認知しないという姿勢を崩さない。

ペトルーシカが入ってきて，主客とは正反対の方向に目を外らし，無視してから，「食事は二人前取って参りますか」と聞く。ペトルーシカまでが，語り手のように主人公に解け合うということはない。しかしペトルーシカもあることを悟っていて，批判しながら調子を合わせるのか，それともゴリャートキン氏の幻聴であるのか，いずれとも取れる言葉で主人に対している。作者はこのようなどちらとも取れるような，いわば韜晦の術を各所で援用して，読者を最後まで騙し，煙に捲くのである。ペトルーシカは，一晩中一人芝居をして騒いだ主人に，翌朝，「旦那は留守ですよ」とからかうような，冗談を言う。また，主人公は「一匹の蚊でさえ彼を張り倒すことができたくらい」衰弱していた（第11章）というような誇張とか，語り手の縦横の活躍が目だつ。そこでは公平，客観主義を捨てて，誇張，粉飾，騙し，偽瞞，脅迫，そそのかし，教唆，扇動，示威，諧謔，冗談，韜晦，隠ぺい等のあらゆる方法が使われる。これらを強引に使って，読者が慣らされれば，そこには別の新しい空間が創り出され，人間の秘密に近づくことができるという，ドストエフスキー一流の目論見があるようだ。

登場人物の中でアントン•アントーノヴィチ•セートチキン係長と下僕のペトルーシカは主人公ゴリャートキン氏の状態をほぼ見抜いている。それぞれが主人公に示す態度は異なるが，応対が柔軟であり，深みが感じられる。

さて話し合いに入った〔旧〕は〔新〕を「貧しい（哀れな）人間 bednyj che-

lovek」と考える。しかし，同姓同名であると聞かされて，「冗談どころの騒ぎでない」とうろたえる。それは自己評価である。

〔新〕は言う，「私はこの土地では，見捨てられた（繋がりのない孤独な）zaterjannyj，哀れな bednyj 男」であり，継ぎのあたった燕尾服を身につけ，由緒正しい身分証明書をもち，不慣れからうまく物乞いのできない，生まれのいい乞食 blagorodnyj nishchij である。これはつまりゴリャートキン氏の上京時の自己紹介であろう。

貧しい食事が瞬く間に済んだのち，〔新〕の身の上話しが3～4時間続く。地方の役所で零落してペテルブルグへたどり着き，ある親切な人の情けで今度の職にありついたという経緯である。波乱に富む身の上話しは，最たる虚構の話し samaja pustaja istorija であるにもかかわらず，砂漠を流浪するユダヤ人に天から降ってきたというマンナ密 manna（旧約）のごとくに彼の心に沁みた。

客との和合にゴリャートキン氏は満足する。その理由は第一に，心が落ちつき，第二に，自分の敵を恐れなくなったばかりか，彼らに断固たる決戦を挑む覚悟がついたからであり，第三にいまや人に庇護を与え，善根を施すにいたったからである。泥酔した後，「度をすごした」ことを後悔し，客の顔をのぞいて「不愉快な絵だ！　茶番だ！」と思う。こうして『分身』の第二日は終わる。

小説の第三日（第8章），主人公が起きてくると，部屋の中には客の姿ばかりか，客の眠ったベッドさえない。ペトルーシカに客の行方を尋ねると，無視されたあげく，逆に「旦那は留守ですよ」というしたたかなしっぺ返しを食う。役所で〔新〕に鼻を突き合わすと，彼は「わたしは特別の任務を命ぜられてます」と隣の部屋へもぐりこんだ。これはゴリャートキン氏が「前から予感がしていた」ことだ。ここで主客はがらりと逆転する。

アントン・アントーノヴィチと仮面について問答。私は「仮面はかぶりますが，その中で暮らすことが必要になったときだけです。」これはゴリャー

トキン氏が信じる顔哲学であるが，彼が確信し，主張するのはつぎのような処世術である。

彼は，クレスチャン・イワーノヴィチ医師に対して要旨つぎのような演説をする（第2章）。(1) 私は私の道を歩いている，独自の道を歩いている。誰にも左右されることのない人間である。(2) 言葉の修辞法なんて習ったこともない，その代わり私は……行動するのだ。(3) 社交界では靴で床を磨くまねができなければならないし，洒落や地口も要求されるが，そういうトリックめいた芸当は私には縁がない。(4) 私は陰ではこそこそやらず，公然と，策を弄せずに行動する。(5) 堂々と回り道をせずに行く。(6) 私は曖昧な言葉が嫌いである。浅ましい偽善は容赦しないし，中傷や告白を唾棄する。(7) 仮面（マスク）をつけるのは仮装舞踏会のときだけで，毎日そんなものをかぶって公衆の面前を歩き回るようなまねはしない。これが彼の意識の解説である。

これをゴリャートキン氏は実生活に彼独自の方法で適用したために，職場で手きびしい仕打ちを受ける。彼は考える，「これは，おそらく，ただそんなふうに見えただけか，あるいはひょっとした間違いで，実際に起こったことじゃないのかもしれない。それともあそこに行ったのは間違いなくこのおれなんだが……それをなんかの拍子でじぶんのことをてっきり他人と思い込んでしまったのかもしれないぞ……だが要するに，これはまったくありうべからざる出来事だ。」およそこの種のロジックがゴリャートキン氏人間の本領とする現実との辻褄の合わせ方である。

右の結論を下したその途端，書類を抱えた〔新〕が部屋の中に飛び込んできた。〔旧〕は昨夜の客〔新〕の袖をしっかりとつかまえた。「なんですか？」〔新〕は横柄な態度で〔旧〕をじろりと眺めながら言った。〔新〕は「可愛い坊や！ dushka moj」と二本指で右の頬をぎゅっとつまんだ。

〔旧〕は〔新〕の理不尽な，人の虚をつく仕打ちに，全力を挙げて最後まで抗議することに覚悟を決めた。彼が抵抗のロジックとして用意したものは，「きたならしいぼろ切れ」論である。彼は「汚らしいぼろきれであるが，自

尊心をもったぼろ切れ，生気と感情をもったぼろきれである」という表現で自分を表した。もっとも自尊心と言っても内気なものであり，感情と言っても控えめなものだが，しかもぼろぎれの汚い襞（ひだ）にかくされたものであるが，しかしやはり感情は感情なのである……という，いわば彼の非俗物を誇示しようとする詩である。

これに対して〔新〕はごますり男の見本のように描かれる。役所の引け時，混雑する手荷物預かり所の人込みにまぎれて，彼は外套をはおると皮肉な目つきでじろりと〔旧〕の顔を見た。そうすることで「厚かましくも公然と，彼に対する敵対意識を示した」。と思ったら，今度はこれ見よがしに役人たちのまわりをちょこまかし始めた。「ある者にはちょっとことばをかけ，ある者にはなにかひそひそと耳打ちし，第三の者にはうやうやしく接吻し，第四の者にはにこやかに笑いかけ，第五のものには握手すると，いかにも愉快そうにさっと階段を駈け降りた。」〔新〕は〔旧〕のはるかに上手（うわて）を行く俗物である。

第四日目（第10章），眠ったかと思うとすぐ覚める一夜を明かしたゴリャートキン氏は夢の中で，怒りっぽいアンドレイ課長に弁明し続ける。(1) そこへ例の無作法な〔新〕が現れてゴリャートキン氏の名声を完膚ないまでにこきおろし，彼の自尊心を泥の中に踏みにじり，職場と社交界での地位を横取りしてしまう。(2) 彼は，先日誰かに頭をこづかれた件についてなぜ抗議がしにくかったのかと考える。すると自分がやってしまった「些細な，あるいはなかなか重大な卑劣行為 podlosti」が思い出された。そこで彼は「偶然，いやむしろ他人への思いやりから，ときには自分のおかれた孤立無援の境涯から」そうなってしまったのだと，自分を納得させようとする。しかしなぜそんなことをしたのか，彼自身は百も承知なのだ。(3) ゴリャートキン氏は「夢うつつに顔を赤らめ，その赤面を抑えようとして……こういうところにこそ，毅然としたところを見せてやろう」とつぶやく。しかし反転して「毅

然としてみてなにになる」と結論してしまう。そこへまた〔新〕が顔を出して「いまさらぼくらが毅然としてみたところで仕方ないでしょう」と言う。(4) ゴリャートキン氏はすばらしいメンバーのパーティに列席している夢を見る。そこにも〔新〕が来て〔旧〕の勝利と栄誉を壊す。〔旧〕が口を開く暇もないうちに人々は偽物の〔新〕に心身ともに打ち込んでしまい，〔旧〕を軽蔑とともに退けてしまう。

(5) ゴリャートキン氏の意識の裏面に横たわる夢の世界は，彼の許容しえない人間についていわば解説を与える。すなわち醜悪な〔新〕は言葉巧みに人に摺りよって懐柔するのだが，こうして懐柔されるやいなや，周囲の人は一人としてそれまでの自説を変えなかった者はいなかった。そのとき威力を発揮する魔法は，甘美なお世辞，おだてである。しかも重要なことは，これが一瞬の間に人々の中に効き目が現わすこと，したがって人々は一瞬にして意見を変えることであった。(6) 人々は反作用から，「正義を愛する，思想穏健なる，隣人愛をもって知られる」〔旧〕を排斥し，迫害し，爪弾きする。人間の意識の中の，論理と恣意とを，どのようにかして繋ぎ合わせているはずの意識の回路は，夢の世界において，その一部を露呈する。

これらの夢は，自らの内に〔新〕が住みついたゴリャートキン氏の，意識の働きが裏面で演出したものである。その内容は〔新〕〔旧〕間の葛藤，相克である。いまその回路の機能それ自体について見てみよう。夢を伝達するさい，ハードウエアとしての彼の意識の回路は，少なくとも語り手の記述から判断して，異常な機能であるようには思えない。それが過度の反応であることはたしかだとしても，夢を生み出し，伝達するところの意識の回路がこのような反応をしたこと自体を異常とは言えないのではないか。そこには辻褄の合わない錯乱状態などは認められず，それはそれなりの論理的展開をしているという意味において。

他方，たしかに，意識の葛藤を実際的に処理していく過程は突飛であり，

揺らぎが大きすぎ，対処が極端で適切を欠いたということは言えるだろう。そこで現実的な生活に狂いが生じ，そのために彼は精神分裂者とみなされた。やはり生活者の思想と行動としては，目まぐるしいほどの正反の意見の反転が無限に繰りかえされる，その極端な意識の運動は，分裂症状的であろう。しかし人間の意識の運動がこの回路を介して二項対立の無限の審査を繰りかえしていることは，その内容がなんであれ，人間に一般である。

ドストエフスキーの関心は，一つにはゴリャートキン氏の特異な意識の運動に対して向けられていることはたしかである。しかしそれは何のためかと言うと，むしろ，これを具体例として，人間の意識の運動の連関を取り出すことに関心を向けていたと言うべきではなかろうか。

意識が人間を規定するとすれば，その意識の構造と働きはなにか，人間の諸基準と恣意との連関，また偶然との連関はどのように形成されているのか，この設問への文学的解答が即，彼の後の作品であると言ってもいいだろう。ドストエフスキー二十三歳の作品『分身』はその基石を置いたのであった。

作者は語り手をして〔旧〕と〔新〕の対立を誇張して描かせる。〔旧〕は床磨きを拒否し仮面をかぶらないことに彼の独自性があるという主義を主張する。〔新〕について，語り手はこれを，ごますり男，高慢に振る舞う悪玉として描く。ゴリャートキン氏にとって，人間の評価は，お世辞を言う，言わないの二分法が基準とされ，人間は俗物と非俗物に分けられる。そして非俗物は俗物の奸策にはまって身を滅ぼす。この小説は，勧善懲悪とは反対の結果が結末となる。しかし〔旧〕は〔新〕によって破滅させられたのではない。自己意識の中の二律背反 PRO ET CONTRA と他者との敵対関係 ANTAGONIZM とは，混同することのできない，階級の異なる矛盾である。ゴリャートキン氏自身の中で〔旧〕から切り離された後の〔新〕の存在はありえない。

〔新〕は追ってきた〔旧〕の求めに応じて喫茶店で短い話し合いをする（第11章）。この時〔新〕は話しに応じるための条件として，「条件が一つあります

……そこですべてが自然に解決されることです tam vse soboj ob-jasnit'sja.」と言う。ところが〔旧〕の方も，そう言われる直前に，「誠心誠意，率直な，誠実なことばで話しをする」ことを提案し，「そうすれば，なにもかも自然に解決がつきます Togda nepremenno vse samo soboj ob-jasnit'sja.」と言っている。samo soboj ob-jasnit'sja すなわち，なにもかも自ずから明らかになる，ひとりでに理由が明らかになるということ，これをここでも両者は異なる意味で使っている。〔新〕は〔旧〕のドイツ女との一件を〔旧〕の主張する非俗物の反証に挙げてあてこすり，〔旧〕はこれにたじろぐ。〔旧〕は断じて潔白であること，誤解が相互にあると主張，自分にも誤解があったことを認める。お世辞を言わず，自然に逆らう人，非俗物〔旧〕ゴリャートキン氏は，本当にどの程度，どのような非俗物であったのか。無論これがこの作品本来の問いの一つだが，それはどこに基準を求めるべきなのか。後に非ユークリッド的世界の視点を求めるようになるドストエフスキーは，ここですでに手探りを始めているのかも知れない。

取りすがる〔旧〕を振り切って立ち去るとき〔新〕は言う，「いまは実につらい時代です。……人生は玩具じゃありませんよ」「宿命，運命ですよ rok, sud'ba！なにもかも運命に罪があるということにしようじゃないですか。」ここに取り出した「自然に解決」「宿命，運命」というテーマもまた尾を引くのである（「弁証法に代わって生活が現れた『罪と罰』**等」）。

〔注〕

* 新谷敬三郎『ドストエフスキイの方法』，1974，海燕書房。

** F. M. DOSTOEVSKIJ POLNOE SOCHNENIJ V TRIDTSATI TOMAKH, MOSKVA TOM SHESTOJ, PRESTUPLENIE I NAKAZANIE.

なお，(一)の注に書き忘れたが，『分身』の副題「ペテルブルグ詩」は1866年に改作されたときに付けられたもので，1846年の初版では「ゴリャートキン氏の冒険」。